

先人が残してくれた宝物「西の湖・ヨシ」を 未来に引き継ぐ新たな取り組み

使われずに残っていくヨシの新たな活用

ヨシの消費量の減少



刈り取っても売れない



ヨシが残ってしまう

●西の湖ヨシ灯り展 開催時期：9月下旬頃

約18年前に地域のヨシ加工事業者の発案で、「子どもの頃からヨシに触れながら何か創作作品を作ることにより、自然に親しみ、環境のことも学べ、大人になった時に、いろんなアイデアのきっかけ作りになれば」との想いから、「ヨシ灯り展」を開催。現在では、全国から400点にも及ぶヨシの創作作品の灯りが辺り一帯を幻想的な世界に導いてくれます。

<https://www.azuchi-shiga.com/20110924-yoshiakari.htm>



後継者不足等で悩むヨシ地の新たな取り組み

ヨシの消費量の減少



ヨシ産業の衰退・後継者不足



ヨシ地の管理ができない

●ヨシ刈りボランティア 開催時期：1~2月

ヨシは、一年ごとに刈り取らなければ良いヨシに成長しません。ヨシ刈りをしてヨシ焼きをすることで、新たに芽吹き良質なヨシが育ちます。ここで立ち上がったのが、地元企業や地域の各種団体。このボランティア活動により、これまで先人が培ってきた地域の財産が未来へと繋がります。

ヨシ刈り 近江八幡

検索



地域の宝物
「西の湖・ヨシ」を
体験しよう！

「ヨシ灯り展やヨシ刈りボランティアへの参加、観光で水郷めぐりに訪れ、ヨシ製品を購入する」といった皆さんの応援、支えが未来へと繋がります。

発行：近江八幡市 観光政策課・企画課

観光情報サイト

www.omi8.com



※このパンフレットは、ヨシを使用しています。

このヨシプロジェクト事業は、
ふるさと納税寄附金を活用しています。
2025年3月

Touch & Reed

ヨシと生きる。

三方ヨシ

「人よし・自然よし・未来よし」

滋賀県びわ湖最大の内湖「西の湖」。ラムサール条約に登録されており、水鳥等の生息にとって重要なヨシ群落を未来に残すため、地域の人々によって守られています。この自然の恵み「西の湖・ヨシ」は、古くから四季折々の湖国の原風景としてこの地を訪れる人々の心を癒し、地域の生業やまつりとして伝承され、人々の営みを支えています。

「三方よし」ってなあに？

江戸時代に全国で活躍した近江商人の経営理念のひとつ。商売において「売り手」と「買い手」が満足するのは当然のこと、「社会」に貢献できてこそよい商売という考え。現在は、SDGsに繋がる日本式の企業経営として再評価を受けています。



近江八幡市って どんなまち？

びわ湖の東岸のほぼ中央に位置し、かつては、織田信長公の最後の居城「安土城」や関白豊臣（羽柴）秀次公の居城「八幡山城」、そして重要文化的景観「近江八幡の水郷」がある歴史・自然が息づくまちです。このまちの礎を築いた秀次公が、築城の際に開削した外堀（八幡堀）をびわ湖とつなげて交易に利用したことで、城下町が発展を遂げ、「三方よし」で有名な近江商人（八幡商人）を輩出したまちです。

西の湖ってなあに？

市域の北東部にはびわ湖最大の内湖「西の湖」があります。この西の湖の周囲には、もとは大中の湖ほか3つの内湖があり、戦後の食糧不足を乗り切るための国の政策で干拓される予定でしたが、地域のヨシ地の保存活動により、現在の西の湖のみが残っています。



ヨシ(Reed)ってなあに？

ヨシは、四季折々の景色を見せてくれます。4月に芽を出し、5月には葉っぱが両手を広げるように伸び、生き生きとした美しい緑の光景を醸し出します。お盆過ぎには、4m近くなったヨシ原に。やがて、緑の穂が黄色くなり、11月になると葉も茎も枯れて赤みを帯びた黄色になります。冬には、北風に吹かれて葉をもぎ取られながら凜と立っているヨシの姿に惹かれます。やがて、ヨシ刈りが始まり、3月末には、地焼き（ヨシ焼き）が始まり、広々とした焼野原になります。黒色になったそこから、新芽が吹き出し一雨ごとにヨシが芽吹いて緑に変わります。

ヨシって
こんなに、
いろんな色
があるんだね！



- 湿地や水辺に生育
- イネ科の多年生植物
- 4m近くの長さまで成長
- 枯れた茎の中が空洞
- 西の湖は、日本有数のヨシ群落(約109ha)

ヨシと人の営みのサイクル

定期的にヨシを刈り取り、ヨシ焼きをすることで灰が肥料となり、冬の間に眠っているヨシを目覚めさせて新たな芽吹きを促し、新たな良質なヨシが育っていきます。

春



フナやコイなどの魚が産卵

夏



ヨシキリの鳴き声や風になびくヨシが奏でる音が楽しめます

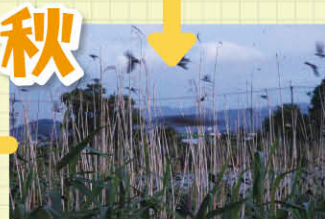
春～夏
ヨシキリが
ヨシの根本付近
で巣を作って
子育て!!

冬



ヨシ焼き

秋



夏～秋
数万羽のツバメが
お宿として住みます

ヨシは多様な生物の棲家として
重要な役割をはたしています！

ヨシと人のつながり

祭事

火祭りと呼ばれる日牟禮八幡宮の「八幡祭り」や沙沙貴神社の「大松明奉納」など、各地域でヨシを使って松明を結び上げます。松明を作ること「松明結い」と呼び、西の湖周辺に生えるヨシを束ね、村人全員で編んだ藁縄で結ぶことから、その名がつけられました。



観光

美しい自然環境が残る重要文化的景観「近江八幡の水郷」では、琵琶湖八景のひとつ「春色安土・八幡の水郷」を水郷めぐりでお楽しみいただけます。



産業

ヨシの用途として古くから続く、ヨシ葺き屋根、スダレ・フスマや障子・敷き物などがあります。最近では、ヨシを使った紙や笛、そしてうどんやジェラート、西の湖にある島状の田で獲れた米を使った地酒などの食品開発などにも発展してきました。



学習

地域の小学校では、ふるさと学習として、西の湖やヨシ、そして魚や水鳥などを船にのって身近に体験できる環境学習を進めています。



地域の人々に親しまれ、愛されているヨシが、
「ヨシ葺き屋根の減少」、「消費量の減少」等により、
ピンチにあります。